

プロフィール



©Masafumi Tamura

吉岡 知広

チェロ
コーディネーター

仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科(共学)を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後、ライブツィヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともに、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍。卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ビバホールチェロコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C・ギガーの各氏に、室内楽を今井信子氏、東京カルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。



須山 暢大

ヴァイオリン

東京藝術大学音楽学部卒業。第1回宗次エンジェルヴァイオリンコンクール第2位。シオン・ヴァレ国際ヴァイオリンコンクール入賞。ソロ・ヴァイオリン、コンサートマスターを務めたCD「CHAMBER MUSIC PLAYERS OF TOKYO in 紀尾井ホール」がレコード芸術の特選盤に選ばれる(オクタヴィア・レコードより好評発売中)。現在、大阪フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター。



©Masafumi Tamura

加藤 直子

ピアノ

仙台市泉区出身。宮城県宮城第一高等学校、洗足学園音楽大学を卒業後、ブリュッセル王立音楽院修士課程を首席で卒業。同音楽院オーケストラおよび仙台フィルハーモニー管弦楽団とリストのピアノ協奏曲第2番を共演。第61回全東北ピアノコンクール第1位並びに文部科学大臣賞。これまでにピアノを澤田和歌子、庄司美知子、菅野潤、杉本安子、菊地洋子、ヨハン・シュミットの各氏に師事。



©Kosuke Atsumi

坂本 彩

ピアノ

兵庫県出身。東京藝術大学卒業後、ベルリン芸術大学及び同大学院修了。これまでに全日本学生音楽コンクール全国大会第1位、アミグダラ国際ピアノコンクール優勝、仙台国際音楽コンクール、ホセ・イトゥルビ国際コンクール等にて入賞。各地でソリスト、室内楽奏者として活動する他、2020年よりブラームス全曲演奏プロジェクトを開始。京都市立芸術大学、大阪音楽大学、神戸女学院大学各非常勤講師。



プログラム

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

ピアノ三重奏曲 第1番 変ホ長調 op.1-1

ピアノ・ソナタ 第17番 二短調「テンペスト」op.31-2

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第7番 ハ短調 op.30-2

11のバガテル op.119



仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ

Facebook 公式ファンクラブ イズミノオトモダチ

コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね!”してください。

URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>



＼ 公式 SNS で情報発信中！ ／



各 SNS アカウントはこちら

仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通して、地域の文化活動を支援しています。

第12回

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ イズミノオト

ベートーヴェン

ハイリゲンシュタット “ノ意思”

チエロ・コーディネーター

吉岡 知広

ヴァイオリン

須山 暢大

ピアノ

坂本 彩

加藤 直子

2025.7.13 日

開演：午後3:00 (開場：午後2:30)

仙台銀行ホール イズミティ21 小ホール

仙台市地下鉄南北線 泉中央駅北 3 出入口よりすぐ

チケットに関するお問い合わせ

仙台市市民文化事業団 総務課

TEL：022-727-1875 (平日 9:30～17:00)

公演に関するお問い合わせ

仙台銀行ホール イズミティ21

TEL：022-375-3101 (9:30～19:30 休館日を除く)

主催 後援 協力

公益財団法人仙台市市民文化事業団 | kbh 東日本放送

公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団 | 協賛

日本音楽財団 (日本財団助成事業)

企画制作

仙台銀行ホール イズミティ21 | HAL PLANNING

株式会社仙台銀行 | 宝来産業株式会社

1770-1827

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

1770

12月16日
ボンに生れる

1792

ウィーンで、ハイドン
から作曲のレッスンを
受ける(94年初頭まで)

1795

●ピアノ三重奏曲第1番
(op.1-1)改訂完成
●ピアノ・ソナタ第1番～
第3番 (op.2) 完成

1800

弦楽四重奏曲
第1番～第6番
(op.18) 完成

1801

1799年頃から自覚の
あった難聴について、
二人の友人に手紙で
苦悩を訴える

1802

●ヴァイオリン・ソナタ第7番
(op.30-2)完成
●ピアノ・ソナタ第17番
「テンペスト」(op.31-2)完成
●10月 いわゆる「ハイリゲン
シュタットの遺書」が書かれる

1804

交響曲第3番「英雄」
(op.55) 完成

1808

交響曲第5番「運命」(op.67)、
第6番「田園」(op.68) 完成

1809

ピアノ協奏曲第5番
「皇帝」(op.73) 作曲

1811

ピアノ三重奏曲第7番
「大公」(op.97) 作曲

1818

難聴がひどくなり、
筆記帳を使う

1822

●ピアノ・ソナタ
第32番 (op.111)
完成
●11のバガテル
(op.119) がまと
められる

1824

交響曲第9番「合唱付き」
(op.125) 完成

1826

弦楽四重奏曲第16番
(op.135) 作曲

1827

3月26日
永眠、享年56歳

作品番号で追う ベートーヴェンの 「挑戦」

吉川 和夫
(作曲家)

数はともかく、作品を整理するために「作品番号」というものが記されます。「作品31」とか「op. (オーパス) 31」というのがそれです。作曲家が自分で付ける場合もあるし、出版者などが付ける場合もある。バッハの「BWV」、ハイドンの「Hob.」、モーツァルトの「K (ケツヘル)」などは、後世の学者が作品目録を作成するために付けました。数字は、必ずしも作曲年代順ではなく、作品のジャンルによって分けられることもあります。また、20世紀以降には作品番号を付けていない作曲家も多いです。

さて、ベートーヴェン。

ベートーヴェンは、基本的には、自分で年代順に作品番号 (op.) を付けていた (おそらく歴史上最初の) 作曲家だったようですが、年代順というところでは多少例外もありつつ、全部で138。他に、op. が付けられていない曲は、「WoO」という番号で整理され、その数220余り、他に「Hess」番号などもあります。ちなみに、有名な「エリゼのために」はop.ではなくてWoO59です。

ベートーヴェンといえば、9曲の交響曲、ピアノ・ソナタが32曲、弦楽四重奏曲が16曲、ヴァイオリン協奏曲が一つとピアノ協奏曲が5曲、ヴァイオリン・ソナタが10曲、チェロ・ソナタ5曲、オペラは「フィデリオ」1曲…と、500曲とも言われる全作品のうち、私たちが日頃耳馴染んでいるのはほんの一部。日本では「楽聖」と呼ばれ、広く受容されているベートーヴェンでさえ、それが実際です。では、こうした、いわばスタンダードな作品以外は凡庸なのかといえば、決してそうではありません。今回の「イズミノオト」のプログラムは、作品1と30、31、そして119。ベートーヴェンの作風の変遷を追うように選曲されています。

ピアノ三重奏曲 第1番 変ホ長調 op.1-1

1792年11月、故郷ボンを発ってウィーンに到着したベートーヴェンは、カール・リヒノウスキー侯爵の後ろ盾を得ながら、ハイドンから作曲のレッスンを受けます。作品1の3曲のピアノ三重奏曲は、ウィーンに移って最初の重要な成果となりました。ベートーヴェンは、同一編成の作品を3曲セットで作曲することが多く、ピアノ・ソナタ第1番から第3番 (op.2-1～3) ヴァイオリン・ソナタ第1番から第3番 (op.12-1～3) などと同様に、ピアノ三重奏曲も第1番から第3番 (op.1-1～3) が、作品1という番号を共有する3曲セットでまとめられています。ただ、第2、第3番が1794から95年に作曲されたのに対して、第1番は、ボン時代に着手、94～95年に改訂されたようです。「作品1」とは処女作のようなイメージがありますが、後年「WoO」番号が付いた作品をすでにいくつも作曲していました。だとすると、この「作品1」は、ハイドンの弟子として、作曲家としての一歩をふみ出した作品です。同時期の1795年までに、ピアノ・ソナタの最初の3曲 (op.2-1～3) も作られました。1811年には、ピアノ三重奏曲の大傑作、第7番「大公」op.97を完成させることになるベートーヴェンの若き肖像を、ここに聴くことができます。

ピアノ・ソナタ 第17番 ニ短調「テンペスト」op.31-2 ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第7番 ハ短調 op.30-2

1801年6月から、ベートーヴェンは二人の友人、医師ヴェーゲラーと牧師アメンダに相次いで手紙を書き、三年来聴覚が次第に弱くなっていること、「劇場で演技者たちの言葉を聴き取ることができるため

に僕はオーケストラの座席のすぐ脇にいなければならない。人が小声で話しているほとんど聴こえない」※と打ち明けています。また、腹部の不調も訴え、11月には、人からすすめられて微温浴や薬草の湿布を試しているが、症状は一進一退であると書いています。そんな中でも、ヴァイオリン・ソナタ第5番「スプリング」や交響曲第2番が書き上げられました。これらの曲の明るさや活気に、身体的な苦悩の痕跡を見て取ることはできません。

1802年10月、ウィーン郊外の滞在地ハイリゲンシュタットで、二人の弟カールとヨハンに宛てた手紙を書きます。いわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書」です。耳の疾患という、音楽家にとって致命的とも思える症状を自覚し、怯え、死を強く意識した気持ちも見え隠れします。財産分与について指示し、「墓の中に自分がいてもお前たちに役立つことができたら私はどんなにか幸福だろう!」と書く一方、「芸術の天才を十分展開するだけの機会をまだ持たぬうちに死が来るとすれば、死は速く来過ぎるといわねばならない」、「(死は)来たいときに何時でも来るが、私は敢然と汝を迎えよう」など、想いは揺れ動きつつも、自死への想念に取り憑かれた「遺書」ではなく、自らの運命に立ち向かおうとする決意表明のように読めます。この手紙は投函されることはありませんでした。引き出しの奥にしまわれ、1827年のベートーヴェンの没後に発見されます。弟たちも読むことはなかったでしょう。

ヴァイオリン・ソナタ作品30 (第6～第8番) は、1801～02春、ピアノ・ソナタ作品31 (第16番～第18番) は、詳細不明ながら1802年作曲とされています。ヴァイオリン・ソナタ第7番のハ短調という調性は、

「悲愴」ソナタや、のちの交響曲第5番を思い起こさせ、耳の疾病や体調不良が進む中での、ベートーヴェンの心象とパラレルな関係にあるとは言えます。しかし、このヴァイオリン・ソナタもピアノ・ソナタも、3曲セットで作曲され、作品番号を共有する他の作品はいずれも長調。多彩な転調、レチタティーヴォのような声楽的フレーズの挿入など、大胆に曲想を転換させることによって広がりをもたらすといった、後期ソナタの孤高につながる実験はすでに果敢に進められており、作品に向かう挑戦的な姿勢、充実した内容を見ると、この時期の作品を「遺書」と安易に結び付ける必要はないと思います。なお、ベートーヴェン自身が、ピアノ・ソナタ第17番について、この曲を理解するにはシェイクスピアの戯曲「テンペスト (嵐)」を読むべきだと語ったとされますが、真偽は定かではありません。

11のバガテル op.119

「バガテル」は、もともと、些細な、取るに足りないものという意味で、器楽のための小品に付けられることの多いタイトルです。先に挙げた「エリゼのために」(WoO59)もバガテルですが、ベートーヴェンは小品集としての「バガテル」を3つ残しています。「7つのバガテル」op.33 (1802)、「11のバガテル」op.119、そして、op.126の「6つのバガテル」(1924) です。

op.33の完成は1802年ですが、以前に書いた習作に手を加えたものも含まれると考えられています。また、op.126が作曲された1823年から24年は、32曲のピアノ・ソナタや10曲のヴァイオリン・ソナタはすでに完成し、ちょうど交響曲第9番「合唱付き」(op.123)が作曲され、第12番以降の後期弦楽四重奏曲が書き始められる頃です。

11曲からなるop.119のバガテルは、曲によって作曲年代が異なり、最終的に1822年に仕上げられたようです。最初の5曲は1802年以前から1804年までに作曲、第7曲から第11曲は1821年より以前に書かれ、第6曲だけが1820～21年に作曲。事実、第6曲の譜面の景色は、他とずいぶん違っていることがわかります。短い曲ですが、その中に異なる曲想がいくつも投げ込まれ、自由で幻想的、実験的です。

バガテルは、単独作品として発想されたというより、大きな作品を作曲する前のウォーミングアップ、あるいは書法のスケッチという意味もあったかも知れません。例えば、第2曲 (アンダンテ・コンモート) のように、分散された和音を弾く中音域をはさんで、低音域と高音域とが短いフレーズで対話するといった書法は、「悲愴」ソナタ (op.13) や「テンペスト」ソナタにも見られますし、オーケストラの低弦楽器と木管楽器の高音とが応答し合っているようにも聴こえます。

ベートーヴェンは、比較的、作品番号から表現の変遷を追いやすい作曲家です。今回のプログラムは、ふだん聴く機会の多い作品ばかりではありませんが、音楽的にも、生きることに「挑戦」を続けるベートーヴェンの強い意思を、浮かび上がらせてくれるでしょう。

※「ベートーヴェン」の生涯
ロマン・罗兰著 片山敏彦訳 岩波文庫